

○議長（牟田勝浩君）

休憩前に引き続き会議を開きます。

一般質問を継続いたします。

次に、23番黒岩議員の質問を許可いたします。御登壇を求めます。23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

おはようございます。きょうはあいにくの雨になったわけでございますけれども、いよいよ師走の声が聞こえるきょうこのごろでございます。月日のたつのは本当に早いものでございまして、ことしもあと残すところ20日余りとなったわけでございます。ことしの一番大きな出来事はといいますと、何といたしまして、あの3.11東日本大震災ではなかろうかと思っております。ここで改めまして、被災によってお亡くなりになられた皆さん方の御冥福と、そしてまた、被災に遭われた皆さん方のお見舞いを申し上げる次第でございます。

また、政治的に一番感動したのは、ことし行われました、あの大阪冬の陣ではなかろうかと思っております。つまり大阪知事選挙と市長選挙が同時に行われたわけでございますけれども、大阪市長に橋下氏が決まったとき、私はテレビの前で思わず「万歳」と叫んだ次第でございます。今度のこの大阪冬の陣、これは今までの既得権益、それぞれの人たちが権利や利益を持っておりますけれども、既得権益を大阪市民の手に取り戻す、あるいはまた維新の戦い、つまり古い政治体制を一新して、そして弱い立場の大阪市民の皆さん方の手に取り戻す、そういう戦いではなかったらうかと思っておるところでございますし、私は特別、橋下市長を知っているわけじゃございませんけれども、よくテレビに出ておられました。その中でも、やしきたかじんのそこまで言って委員会、これによく出ておられました。御承知と思っておりますけれども、この「たかじんのそこまで言って委員会」は、いろいろな考えの方が出られるんですね、自由に自分の発言をされる。そういう中で、橋下氏は物すごく明るく、やはり根明ですね、そして一生懸命と。そういう感じを受けていたところでございますし、辛坊さんや、あるいはまた、たかじんさんから、「父ちゃん、政治家にならんね」と言われているのに対して、彼はいつも「いやー、200%それはありません」と言ってこられました。しかし、それが大阪府知事になられてからは、大阪市長の平松さんと一緒になって水道の一本化、二重行政をなくすということで、そのころは2人タッグを組んで一生懸命頑張っておられたですね。しかし、具体的になるにつれて、総論賛成、各論反対、だんだんだんだん不仲になられて、その水道の統一ができなかったわけです。そのとき橋下市長は、大阪市を解体する、大阪都構想を打ち出し、そして二重行政をなくすという立場をとられました。そこで、御承知のとおり、知事を捨てて市長選に出られたですね。我々の常識から考えてみますと、まず自分が知事において、そして自分の手配、いろんなつき合いを市長選に対して、そして大阪市をとって、そして改革していくという感じでございますけれども、橋下知事は知事を

かなぐり捨てて、大阪市長になって、そして大阪を解体する、そういう形をされたところでございます。

樋渡市長は、大阪とは大変なじみが深いということを知っておりまして、大阪のマラソン大会に出られました。フルマラソンを走られたわけでございますけれども、市長はフルマラソンの練習と言いながら、よく武雄のあちこちを回られたわけでございますけれども、やっぱり練習と言いながら、あちこち点検をされておるんですね。それはやっぱり素晴らしいなと思いましたが、私がここで市長にお聞きしたいのは、どう言いますかね、大阪都構想、これの話はどうでもいいわけでございます、その是非じゃなくてですね、私が市長にお伺いしたいのは、彼の発想力、橋下さんの発想力、その発想の源、これが原点はどこにあると思われるか、まず最初の質問とするところでございます。よろしく願いいたします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

橋下新市長とは友人であります。たびたびいろんな話をしたり聞いたりする、本当に恵まれた立場にあります。その中で、彼が大阪都構想を何でそがん一生懸命すっですかて聞いたことがあります。これは、さしで話したときに聞きましたけれども、実は樋渡さんね、これは私はもうぼつと思いついたわけじゃなくて、やっぱり自分が一市民の立場からずうっと思いよったとですよ。先ほど話が出ました「たかじんのそこまで言って委員会」のときでも、私は実は言うています。僕は基本的に余りテレビ見らんですもんね、新聞が好きですので、見ませんけれど、ケーブルワンは見ます。その中で話があったのは、やっぱり大阪を、誇りを取り戻したいということと、もう1つ、既得権益を打破したいということは本当に念仏のように、御飯ば一緒に食べよるときでも言いんさあですもんね。そういった公私を超えた強い思いが、やっぱり私であつたりとか、いろんなところで言って、その念力が通じたと思えます。

一方で、実はこれは初めて言う話ですけども、私、余り橋下さんのこと知らんやっただすもんね。チャラチャラしたチャラ男て思いよったとですよ。それはなぜかというぎ、ああいうふうな形で言動があつて、私はさっき言ったように、そんなテレビは見ません。そういった中で、実は橋下さんは私のことは驚くごと調べとんさつたとですね。どこを調べとつたか、市民病院の民間移譲です。その中で彼はそういうふうな、こうすればうまくいくんだということで、僕に対して彼はやっぱり聞きんさあとですね、なぜ市民病院の民間移譲、あれ普通やったら絶対せんですよということを言われました。なぜあれを自分の職を辞してまでですね。私はあのときテレビでも、宮本栄八議員も出とんさつたばつてんですね、しかつたん言われよつたですもんね、もうしかつたんですよ。それにもかかわらず、なぜあれをしたんですかと聞かれたときに、私はそれは自分の身をかなぐり捨てても、やっぱり武

雄市のために絶対せんばいかんと。しかも、今の市民には評価されなくても、絶対子どもたちが評価してくれるということの強い信念でやりましたと言ったときに、橋下さんが黙って手を差し伸べられました。私もこれは見習わんといかんとということを言われましたので、そういった意味で意気投合をしたということでもあります。

いずれにしても、これちょっと最後にしますけれども、橋下さんと私は強い共通点があります。それはやっぱり既得権益の打破。それともう1つが、やっぱり一般の市民の皆さんたちが安心して安全で暮らせるということ。それともう1つが、これはちょっと大阪と違いますが、武雄に蔓延しとったとは自虐史観です。何もなくて、武雄は何もなかと言って、こまかときから言われよったですもんね、学校の先生たちからも。これじゃね、まともな子どもは育ちませんよ。武雄は足の引っ張ることばかり、本当に。そういった中で、あれうそですよ、出るくいは打たれる、出過ぎたくいは打たれないというのは。出るくいは打たれます。出過ぎたくいはもっと打たれます。そういうのはだめです。ですので、私はそういう議論は大いにやって結構。しかし、例えば、平野さんはきょうお見えになっていませんけど、江原さんとかがやっぱり加味されて住民訴訟とかというのは、私はそれはやっぱりあってはならないことだと思いますよ。（「議員の権利やろう」と呼ぶ者あり）議員が議決を破ってどうするんですか。宮本栄八議員もお仲間もおられますけれども、そういったことで私はそういう誤った風潮というのを、やっぱり同じ政治家として、私はこれは自分の意見を貫き通したいと、このように思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

その中の根本にあるのは、私がいつも思うのは、橋下さんを見ていても、市長を見ていても、弱者の味方、市民の味方、これだけは忘れてならない。これに立脚しているから強いと思うんですね。私は自分の私利私欲じゃない、弱者という言い方は悪いかしれないけど、つまり市民の味方だと。橋下氏もその発展ですので。実は選挙戦でございますけれども、先ほど与党と言われる民主党さん、そして野党第一党の自民党さんですね、それに共産党さんは自主候補を立てられなかった。そしてまた、自治労も凱旋車を回しながら、そういう戦いの中で、通常であったら勝てないわけですね。しかし、それは橋下氏がやはり弱者の味方、我々の声を聞いていると、既得権益の打破だということを市民が感じたから当選されたんだと思うんですね。平松氏が選挙期間中言っていたのが、独裁から市民を守ると、こう言っていた。独裁から市民を守ると。制度を変えれば物事はよくなるのかと戦った。これに対して橋下市長はこう言ったんですね、政治には独裁と言われるほどの強い力が必要だ。何かを変えるときには、人からやっぱり独裁と言われるぐらいの強い力が必要だ。そして大阪を変えたいのか変えたくないのか、二者択一されたんですね。俗に言われるのが、行動力がある人

は、相手、政敵はですね、よく言う言葉がワンマン、よく言われますね。それが独裁、独裁がいいか悪いか、そう言われるですね。逆に、本当にまじめな人は、融通がきかないと言いますね。そしてまた頼りがいが無い。こういうふうには相手が倒してくるんですね。だから市長は、これは苦言ですけれども、ワンマンと言われるのであれば、それだけもっともっと発信力、住民の皆さんに対してもっともっと発信しなければならないですね。それはなぜかといいますと、聞いている人は、自分の目尺でしか考えない。自分の尺で物を考えるからそうなるんですね。これ実際あった話ですけれども、アフリカでヒョウが死んだという話ね。聞かれたことがあるかわかりませんが、通常アフリカでヒョウが死ねば、熱射病で死ぬとか、餓死するとか、わなにかかったんですね。そういう中に1人の人が凍死したという人がいた、凍え死んだとの話をした。ほとんどの人はほら吹きと言うたんですね。市長わかりますね。実際ヒョウが凍死した話。キリマンジャロに登ったんですよ、キリマンジャロの登頂でヒョウを見た人は凍死したというけど、一般の人はなかなかわからない。これが発信力に要する根拠なんです。それから、瓦れき問題も一緒。私はまさか市長が放射線物質を持ってくるかと思ひまして、緊急質問出しましたよ。構えておりました。しかし、実態を見て、あの状態を何とかしたいということで話しましたということを知りまして、ああそういうことなのかと思ひました。私、今の政府の中では、瓦れきを持ってくるのは大反対ですよ、今の政府のやり方では。これ時間があれば後者のほうで話しますけど。だから、これからはワンマン言われて結構じゃないですか。我々は精一杯後押ししますので、発信力だけつけていただきたいと思ひます。

それでは、順序1に戻りまして、まず、安全・安心について質問をしまいたいと思ひます。

市民の皆さん方が安心して暮らせるためには、我々がちゃんとした安全対策をとらなければならない。我々がちゃんとした安全対策をとることによって市民の皆さん方が安心して暮らせる、こういう因果関係にあると思ひますね。

実は11月2日、インター付近で、ちょうどインターの側道のところで、赤色灯を回しているパトカーを見たんです。そしたら物すごいパトカーの色が明るく感じた、温かく感じたんですね。パトカーそのものも物すごく大きく見えて、頼もしく見えたんです。11月2日の夕方。これはなぜかといいますと、実はその1週間もならないんですけれども、ちょっと前に、東宮裾の元区長さんのところに地元大崎のお巡りさんが来ていた。そこに私が通りかかったもんですから、お巡りさんて、朝早く、あるいは夕方、非常にインター付近は不審者が多いので、パトカーを回していただけないでしょうかと相談したんですよ。1週間もしないうちに回してもらいましたので、うれしかったですね。それもなぜかといいますと、インター付近、子どもたちが朝早く学校に行っている。あるいはまた夕方、側道を通って帰っているんですね。そういうときに何でこういうところに車がとまっているかというふうなところに車が

とまっておって、人が乗っていれば、やっぱり怖いんですね。そういうことでお願いしたわけでございますけれども、インター付近の安全対策について基本的にどういうふうな考え方をされているか、ありましたら答弁を求めたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

やはりインター付近というのは、人の往来の割には、人の監視の目というのはなかなかないと。それは暗がりだったり、構造物があったり、なかなか見えないということで、我々とすれば、これは防犯協会と話をすべき話なんですけれども、極力その防犯灯を、これは議員からも御指摘があったように、つけるといったこと。ただ、それだけだとやっぱり限界があるんですよね。やはり、やみを照らすといったことからすると、先ほどの赤色防犯灯ですかね、といったことも含めて、もう少しちょっと見習うところがあるのかなということを思いながら、先ほどの御質問を伺っておりました。

いずれにしても、やはり一番、これは武雄だけに限らず、インター付近というのは非常に事件も多かたですよね。多いので、そういった意味で、どういうふうな対策ができるかというのはやっぱり知恵をおかししていただきたいと、このように思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

だから、今現在、事故が起こらないような状況なのか、たまたま何かで事故が起こらなかったのかわからないですね、ぎりぎりのところなんですよね。それで、先日、実は東宮裾のほうで、私のすぐ近くで、あそこは西か、盗難事件があった。犯人は捕まりましたよね。これは福岡県の犯人ですよ。それはそれとして、下見をしていたんですね、何日もかけて。だから、どこかに車をとめて下見をしていた。聞くところによりますと、公民館なんか、目立たないところにとめていたと。だから、それ私は見たかもわからない。努めて見たときには車のナンバーを覚えておこうと思いますけれども、なかなかこの頭ですから覚えんどですよ。だからメモしておけばいいなという感じもしますけれども、そういうことです。

そして、5時のチャイムが鳴りますね。そしたら子どもの皆さん、もう帰る時間ですよ、大人は見てくださいという話をして、そしてもう1つ、青色回転灯の防犯パトロールカーが回っていますね。あれも非常にいいと思うんですよ。それをもう一つ進めて、この防犯パトロールカーに車載カメラがつけられないか。そうすれば、車載カメラによってその犯人を早く見つけることはもちろんできますね。この前、中学生でしたか、3人、刃物で事件を起こしたですね。こういうのも事前に防ぐことができますし、車載カメラが回っていると聞いただけで防犯に物すごく役立つと思うんですね。まず防犯に力入れるために、ぜひとも車載カ

メラつきが回っているということをしたがいし、つけていただきたい。

もう1つは、9月議会で吉川議員の質問やったですけれども、自転車盗難の話があつていましたね。非常に多いということで、綿密に調べてここで質問されておりました。だから、吉川議員が言われるように、我々がちょっとした注意で、まず絶対自転車を盗難させないという気持ちになればなんですね。今、自転車が盗難に遭えば、お巡りさんに言う。お巡りさんが調査に行きますね。事件の調査に行く、そしてまた事件が起こる、また調査するじゃなくて、最初に我々がちゃんとした防犯思想を持ちますと、自転車が一つもなくなるのであれば、その間、防犯に回らるっですね。そしたら事件が起こりにくい。事件が起こりにくかったら、また防犯に回られるという、いい関係につながっていくと思うんですね。

そういうことでございますので、ぜひともインターに限らずいいですけれども、一步進んで防犯という立場から、何台でも結構ですので、ぜひとも車載カメラ、それをつけていただきたいと思っておりますけれども、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

橋下さんが大阪府知事時代に、ひったくりのワーストワンやったわけですね、大阪府はずっと40年近く。これを返上したのは、これは余り報じられませんが、大阪府警と物すごく緊密な連携で、その予算というのはきちんとつけよんさったとですね。なかなかこれは報じられません。そういった中で、やっぱりそういう橋下さんの、さっきの話に戻りますけれども、なかなか目立たんところでも丁寧に丁寧にされたことが今回の支持につながったというふうに思っていますし、この件については、実は大阪府警の取り組みについて我々も調べておったときに、やっぱりその車載カメラというのは物すごく有効だということも伺っておりますので、それはやっぱりちゃんとしたところを学ぶというのは我々樋渡市政の根幹にありますので、それはぜひ車載カメラはきちんとつけていきたいというふうに思っております。これがあることによって、もちろんスピーディーに犯人を検挙するということもありますけれども、あることによって周りの皆さんたち、それを見ている皆さんたちが安心感をちゃんと持っていただくということからも、これは非常に効果的であると思っておりますので、これは本年度予算に、次の骨格予算にきちんと計上したいと、このように思います。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

安心感と防犯に大いに役立つと思っておりますので、よろしく申し上げます。

それから、安全・安心で道路問題についてでございますけれども、先ほど市長触れられましたように、側道の西側は今度道路改良しながら街路灯をつけていくという感じで、今、設

計かれこれされております。それはぜひとも3メートル以上の歩道をつくっていただきたい。そして、車道との合い中にきれいなガードポールをはめていただきたい。と申しますのは、吉田有希ちゃんやっただですかね、栃木県、小学校1年生が車に引き込まれて6年になりますけれども、いまだに捕まっていないですね。車に引き込まれて、すぐ殺された。だから先ほど言いましたように、不審者がおったら、いつそういう事件があるのかということで気を使っておりますね。だから、3メートル歩道をつくっていただいて、自転車がそこの中を往来できるし、車道とはちゃんと区別するというような道路設計にぜひともしていただきたいと思いますけれども、今度のこの側道の拡張はどのような考えで進めておられるか、答弁を求めたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

石橋まちづくり部長

○石橋まちづくり部長〔登壇〕

インター西線でございます。これは北方の中村電機付近から高速道路入り口のファミリーマート付近までの区間でございます。現在、調査を行っております、基本的には総幅員の11メートル、それから歩道は一応3.5メートルを確保するという計画で行っております。平成24年度からできれば補助事業で取り組みたいというふうに考えております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

ありがとうございます。道路の考え方が、私はこの前、中野の質問をするまで、ちょっと変わっていたんですね。といいますのが、道路というのは起点、終点あります。起点、終点まで大体計画的、ここは買収はできるだろうというところしか始められなかったんですね。しかし、中野の道路はなかなか、どう言いますか、格納庫の近くは広げることにはできないということで、ずっとできなかったんですね。しかし、地元の、これ名前も言いますけれども、中原幸信さんという方ですけれども、何とかあいば途中まででよかけんしてくれんかいと。地元はどがんでん困とうよという話で、離合できないという話で、瀏上工務店さんに物すごく迷惑かけておるとい話から、執行部と話をしましたところ、ぜひできるところはやりましょうということで、すばらしいとこ途中までできていますね。物すごく地元役に役立っている。けがの功名で、向こうに大きく抜けなかったために大型車が入ってこないんですね。こういうけがの功名も、ああそういうものだなと思いました。

これはいいといたしまして、次の格納庫から中野の公民館までですね、あそこも広げてくれという話でございましたけれども、非常に住家が張りついている。無理だろうもんという話の中で、話を進め出したら、いや、うちはいいですよ、いいですよと結構、実際取り組んだらできてきたんですね。その中の一人の方が、縦に70坪長いと。しかし、下の20坪取られ

れば、50坪なら、家も建てれないし、ちょっと価値がなくなりますよという話が出たら、それも一緒になって、じゃ、うちの土地を隣にやっですよということで、これも話がついたですね。田んぼもお互いの交換分もできた。非常にいいほうに転んでいったと思いますね。

それともう1つは、黒尾の急カーブ、これは市長が保育園に行きよっときから曲がったばいと、第2保育園ですかね、うちの孫も行きましたけれども、曲がったばいという話が、これも市長が音頭取って、市が直接動くことによってできつつあるんですね。今の中野もそうですね。だから、住民の皆さん方の意見を待つのもいいですけど、やっぱり主導をもってやった結果だと思しますので、ぜひともその後進捗状況がどうなっているのか、簡単に結構でございませけれども、お伺いします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

これは極めて重要な話ですので私からお答えをします。

まず、市道中野線の進捗状況は、測量設計がおおむね完了しました。地元説明会を開催し、地元関係者の計画同意をほばいただいたところであります。来年度は、用地測量、補償調査を発注したいと思っております。現在はそれに向けて詳細を調整中であります。

もう1つ、市道黒尾繁昌線の進捗状況は、これも驚くべきことに、改良工事に影響する家屋、あそこのちょっとカーブのあるところの大きなお家ですよね。あそこについては、先日、移転補償契約等を締結し、年度内に解体が完了する予定であります。30年、40年、一步も動かなかったお家が、地権者の本当に深い御理解を得て、そういったことに進んでいます。残りの地権者の用地についても、ほば事業同意を得ておりますので、今年度中に賠償を完了したいと思います。来年度については、道路改良の本工事を発注し、完成予定ということになっています。

ここで、ぜひこれ感謝を申し上げたいのは、実はこれも議会質問が大きなきっかけになっております。これも黒岩議員の御質問でこれがつまびらかになったわけですよ、パネルもあって。やっぱりこれは政治の力なんです。私は政治と行政のちょうど結節点にいますけれども、政治の意思がやはりこういうふうにせんばいかんろうもんということであったときに、それは行政がそれはそうだと言ったときに初めて我々は動くということになりますので、これについては、あれが欲しい、これが欲しいというものじゃなくて、こうすべきだということについて、それは武雄市議会の皆さんたちは一部を除いて深い見識をお持ちだというふうに思っております。そういった中で、私としては、地元説明というのは、これはまちづくり部、石橋部長を中心としてよく頑張ってもらったと、身内で褒めるのもどうかとは思いますが、本当にこれは頑張ってくれたということをも市民の皆さんたちにも報告をしたいと、このように思っております。これが一つの武雄の型として、スタイルとして定着することを私

自身も望んでおりますし、市民の皆さんたちも望んでおられると、このように思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

まさに今のは逆でございます、行政と市長が動けば、やっぱり動いていくという実践ではなかろうかと思っております。ありがとうございます。

次に、IT行政に移っていきたいと思います。

9月定例議会で、3D検索、この話をいたしました。3D検索ですよ、思わぬところで大反響だったんですよ。我々じゃなくてですね、非常に大反響でございました。私が当時言ったのが、おもちゃの絵本を3D、つまり3次元ですね、2次元から3次元にすることによって、おもちゃの絵本がおもちゃ箱になると言いました。あるいはまた、動物の絵本は3D化することでサファリになる。だから、いろんなことを検索しやすいという話をしました。そして私は、魚の絵本を3Dにすれば水族館になると言って、のぞく窓からサバは何匹何匹とることができる。これを概念の物証化と、市長どう思うですかと言うところから、少しずれたんですよ。97%ぐらいわかったという話でしたけれども、あとの3%について、きょうはもう少し話をしてみたいと思いますけれども、パネル、資料1をお願いします。

（パネルを示す）この資料は前見られたことがありますけれども、一つ違っているのは、上に穴あきシートと今度書いたんですよ。3カ月たちましたから、考えてきました。この前のときには、この下のPCから自由に検索できますよという話をしたところ、市長は張りつけができるという話をされたですね。だから張りつけるところを今のソフトとかシートとかいろいろ使っていますね。そこに必要な部分を穴をあけていくと、穴をほがしていくと。そうすることによって、そこを書きかえができる。そういうシートをつくれば、物すごく行政が飛躍するのではないかという考え方ですね。ということでございますけれども、具体的な話ですが、実は先日、杵藤電算センターのほうにお伺いしてまいりました。いろいろ話聞いてきたですね。子ども手当、この子ども手当が電算センターではどのようにされたかという話ですね、こども部含めてですけども。19年の4月には、3歳未満が一律1万円だった。3歳から小学校終了までが第1子、第2子が5,000円、そして第3子以降が1万円だった。これを政権変わってからですね、平成20年4月に、3歳未満から中学校終了まで一律1万3,000円に変えたですね。簡単に変えることによって、いろんなところを変えていかなければならないということで、国からの指針、これがこども部にも来たんですね。国からの指針として、平成21年度にまず予算化をしてくれと。そしたら自分たちで払うからということですね。そして平成22年度へ繰り越し可能、明許繰越してくれということだった。そのシステム経費として、システム開発費ですね、ハードウェア増設費、ハードウェア購入費など2,800万円、

杵藤電算センターでは予算が要りますよということで来たんですよ。しかし、実際、係長を中心に一生懸命研究された。かなり力使われたですね。それによって980万円で済んだんです。同じ補助金をもらうんだから、2,800万円使ってもいいかもわかりませんが、そうじゃなくて、彼が頑張って、あるいはこども部も頑張って、980万円、これは税抜きですけどもね、そういうことができたんです。先ほどの穴あきシートさえつくっておけば、職員の皆さんでも簡単にそこに書き込みができる。書き込みができる先ほどの変換部分を入れればいいわけですから、そういうハードウェアの開発をぜひともしていただきたいですね。

ただ、用心しなければならないのは、これはIT委員会で実は総務省の川島先生をIT委員会にお呼びして、まちづくりについて勉強したんです。元佐賀県のCIO、そして全国のCIOの議長までされた方ですね。気楽に来ていただきました。いろいろ聞きましたけれども、そのとき、ソフトは著作権があるから用心せろという話をされたんですね。だから市長、前から言いますように、そういう著作権とか技術開発とか、いろんなことについては、ITの専門家、あるいは特許取得者、学者などなどに任せて、我々は考え方を進めていくべきだと思うんです。それで、穴あきシート、適当に名前をつけましたけれども、そういうものの開発ね、ぜひとも検討していただきたいと思いますけれども、御答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

とてもいいと思います。一方で、今、検索の技術が物すごくまた進んでいて、今まで、例えば、黒岩幸生ということを検索したときに、今までだったら黒岩幸生さんが、例えば生年月日とか、あるいは顔写真とか、そういったことが出てくるんですね。1対1の検索対応だったのが、今、これ開発中なんですけれども、例えば、黒岩幸生という氏名を打ち込んだときに、何もほかに打っていないにもかかわらず、例えば、市民病院の問題特別委員長とか、趣味が仕事とか、私語は慎んでください。ですので、そういったことが関連して出てくるというふうになっているんですね。ですので、これ一番必要なのは、まさに行政なんですね。行政は紙ベースで残しておく、どうやって探し出していいかわからない。穴あきシートというふうにおっしゃいましたけど、これが紙ベースだとやっぱりできないんですね。ですので、これは電子化する必要は、やっぱり市民の利便性、特に弱者の利便性向上としてやる必要があるのと同時に、私はチーム武雄の一員として被災地にも行きましたけれども、全部行政書類も流されておるわけですね。そういったことからすると、それをちゃんと行政情報を保全補完とする意味からしても、そしてそれをきちんと探し出すという意味からしても、そういった穴あきシートを初めとしてやる必要がある。幸いにして、武雄市には山崎耕史最高情報アドバイザーがいらっしゃるんです、先ほど言ったように、これ議会とよく連携をしますけれども、我々としてはこうしたいと、こうすべきだといったことについて提示をして、

その技術的なことについては、山崎さんを初めとして、川島さんもそうなんですけれども、今の森本C I Oもそうですけれども、武雄を応援したいということを常々おっしゃっていますので、そういった方々のお力をかりながら、いいシステム、いいソフト、いいアプリをつくる必要があるだろうというふうに思っています。これをあわよくば我々としては、他の自治体に売り込みたいということ。それを売り込むことによって、その一部が我々としての税収の一つになりますけれども、それを福祉であるとか、子育てであるとか、教育に還元できるように、そういったことも考える必要があるだろうというふうに思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

今、紙文書の保全という話をされましたけれども、実は、これは9月議会で聞いておくべきでしたけれども、議事録のPDF化をしましたね。そのときに、そのPDF化した後、紙はどうするかという話ですけれども、これは議事録は会議規則を調べてみますと、10年間保存するだけなんです。特別紙文書で残しておけということないんですよ。紙文書にかわるためにPDF化するわけでございますので、これは紙文書を破棄してもいいという考え方はお持ちでしょうか、答弁求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

もう当然、破棄すべきだと思います。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

しばらくはやっぱり行政慣れた人はちょっと戸惑うかわかりませんが、そのためにPDF化するわけですからね、そして検索もしやすくなるわけですから、ありがとうございます。

次に、市長は、初日の演告の中で、ホームページ、そしてフェイスブック化して、それをF&B（ファンバイ）良品というんですか、それを立ち上げると。そして、1,000品目で10億円稼ぐという話をされておりました。その場合、一番大事なことが、形をつくってなかなかまいぐあいいかないのが、普通、武士の商法ですね、役所が行けば。そこに必要なのは、F&B（ファンバイ）良品もやはり利潤追求も必要だと思います。つくってやるだけじゃなくて、利潤追求をしながら、それをF&B（ファンバイ）の中で還元するという考え方が必要だと思うんですね。アマゾンは今度、鳥栖にできるんでしょう。そして本を無料でやるんですかね。そういう話をしておまして、ついこの前の物産祭りですか、ちょうどジャガイ

モの話をご家庭でしておりました。ジャガイモが1袋100円だったんですね。多分そうだと思いますけれども、100円だったと。北海道のジャガイモですよ。通常ネットで買う場合は北海道のジャガイモ100円だと。しかし、送料が200円かかるからやめようという話によくならずですね。しかし、今度は物産祭りで持ってこられたら輸送費がただだった。せっかくネットで全国ネットするときに、価格はどこも同じでなければならないと思う。ということは、輸送費をかけない。それはF&B（ファンバイ）良品で、苦勞して頑張って頑張ってそこに輸送費をかけずに持ってくる。そうすれば、もっと変わらなうんではないですか。その場合、武雄市で一番いいのは、やっぱりF&B（ファンバイ）良品の、がばい武雄のF&B（ファンバイ）良品になるかわかりませんが、ブランド化ですね。そのブランド化のシステムをつくることによって、信用力でどーんと行くですね。この市役所という信用力と、やはり利潤をある程度持って、そしてブランド化していく、こういう発想がぜひとも必要だと思いますけれども、いかがでしょうか、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

（パネルを示す）F&B（ファンバイ）良品はおかげさまでこのように各報道機関で取り上げられました。佐賀新聞、日経、読売、朝日等、大きく取り上げられて、NHKだったり、サガテレビ、KBCなどでも繰り返し報道をされています。それで、私は大きく言って小さく始めます。ですので、3年間で1,000品、年商10億円を目指します。無理かな。ですが、その中で11月7日に2品始めて、今8品あります。これ非常に実は好評で、これはきのう福岡市の高島市長のところに行ったときも、話題の中心がやっぱりこれでした。ですので、これを全国に、例えば、今私はF&B（ファンバイ）TAKEOというふうにやっていますけれども、これを例えば、F&B（ファンバイ）福岡であるとか、F&B（ファンバイ）長崎であるとか、F&B（ファンバイ）——例えば大阪府の箕面であるとか、そういったところに広がることによって、全国に楽市楽座のように広がればいいなというふうに思っております。これは基本的に手数料は取りません、今のところ。そういった中で、私たちとすれば、どこに利潤追求をしようかというところで、実はこういったソフト、アプリを売ることによって、一定額ですね、我々のほうに、F&B（ファンバイ）TAKEOの中に入って来るような仕掛けをしようと思っています。行政に売ることによってね。これを一部を流通費にできれば回したいということを思っているんです。なぜEUのジャガイモがおいしくて安いかわかるといったことを、これは山崎耕史さんから教わりましたけれども、要するに流通費に補助するわけですね、EUは。ですので、遠いところであっても、EUのジャガイモというのは非常に安いということなんですけど、それを全額補助というのはちょっと考えにくいですので、それはどれだけ利潤があるかによって、それを段階的に補てんをしていくということを考え

ようかな。ですので、そういった中で、これは恐らくこのシステムの中ですよ、市民に負担を求めんじゃなくて、中でそういったことを流通費に輸送費に回すといったことについても、これ多分、世の中で初めてなんですね。ですので、そういった中で本当に地元のものが売れていくということにしていきたいというふうに、安くて売れるようにしていきたいというふうにも思っています。

ちなみに、しばらく前、ちょっと話題になった「いなかレモン」が12月中にF&B（ファンバイ）良品の目玉として出てきます。これはもうめったに手に入らないんですね。ですが、高倉さんが一生懸命F&B（ファンバイ）良品のためにやっていきたいということもおっしゃっていますし、今、一部この話が新聞等々で出たこともあって、例えば、ニューハートピアさんがイノシシの肉まんができたということで、これもF&B（ファンバイ）で出していきたいといったこととか、これをやることによって商品開発が進んでいて、先ほど議員、御懸念のブランド化ですよ。ブランド化というのも、これは我々がわあわあわあわあ言うわけじゃなくて、実際これに乗っかっている人たちが多分ブランド化をしていただけているので、その後押しをぜひしていきたいなというふうに思っております。

そういった中で、これをぜひ今度、お鍋セットとか、あるいは野菜ですよ。そういったのでぜひお送りされる際は、ぜひこれは地元の地産地消、そして地元の生産者を応援するという意味でも、F&B（ファンバイ）良品を、特に黒岩議員の御質問のときは多くの皆さんたちがごらんになられていますので、ぜひ御活用していただきたいというのと同時に、これちょっと私から最後にしますけれども、これは一括して商工会議所の皆さん方に説明会をちゃんとしようと思っています。やっとなシステムも構築できましたので、そういった中で呼びかけをして商品開発を一緒に進めていくと。これは武士の商法になってはだめです。ですので、民間のあきんどの力をかりて、そういった中でオール武雄としてF&B（ファンバイ）良品になるように私たち自身も取り組んでまいりたいと、このように考えております。また、日程等については、市報等にきちんと掲載をして、F&B（ファンバイ）良品の仕組みであるとか、どういうメリットがあるかとか、どういうふうに気をつけなきゃいけないかとかいうことについての説明会を早ければ年明け、ちょっと年内は議会に私も専念いたしますので、年明けにしてまいりたいと、このように考えております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

先ほどブランド化という声が1つと、もう1つは、EUは流通に補助しているという話ですね。しかし、何のことはないというのは、ブランド化してということではありませんけれども、例えばマクドナルドさん、何でもいいですけれども、全国チェーンを持っているところは、そこはいつも何人かが行ったり来たりしているんですよ。だから、流通が要らない

とはおかしいですけれども、例えば、武雄でとれるのを北海道に持っていくにも、車が行きますから乗せさえすればいい。その各駅、まちで乗せればいいということね。だから全体に補助をして、そして自分のところを売り出しているというのがやり方ですね。そういうシステムを私がブランド化と言ったんですけれども、そこまでやっばり上っていけば、かなりのことができるということございますので、単純にがばい武雄を売るだけじゃなくて、そういう流通機能をつくるという意味でございますので、よろしくお願ひしたいと思います。

今回は、先ほど言いましたように、3.11、なぜ進まないか、東日本が。やはり原発なんです、放射能。我々も玄海原発をすぐ近くに置いているということがあれば、いつ放射性物質が飛来してくるかわからないという危険な場所におる。これは原発を稼働している、稼働していないにかかわらず、やはりそういう危険地区にあるんだということをまず念頭に置きながら、6月議会、あるいは9月議会に質問をしてまいりましたので、それに続いて質問をしたいと思ひます。

実は11月18日の新聞ですけれども、枝野大臣が、玄海再稼働を認めずという記事が載ったんですね。九電、第三者委員会対立で認めなかった。つまり、新聞報道ですけれども、17日に古川康佐賀県知事の関与をめぐる、これやらせメールですね、九電が第三者委員会の元委員、これは郷原さんでしょう、と対立している事態を受け、玄海原発の再稼働を当分は認めんと、こういう話をされた。これは第三者委員会と対立しているような企業統一状況では到底再稼働を認めることができる会社ではない、九電を批判ですね。そして福島党首も全く同感だと言われた記事が載っておりました。私、この記事を見て、がっくりしたというか、情けないなと思った。我々は安全か安全でないかということで一生懸命しているんですよ。だから、特に1号機、あれは怖い。確かに怖い、もろくなっているということで、県議会でも問題になりましたし、我々もそこ注目しているんですね。そして、九電は1号機を検査しないような話をしていた。そういう体質だから稼働させないというのはわかりますけれども、お互いもめているからね。その再稼働させないというのは、論点がぼけてしまうと思ひますね。やはりあくまでこの再稼働するしないは、いい悪いは別として、安全か安全じゃないかですべきだと思ひますけれども、いかがでしょうか、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

これは佐賀県も間違い、九電も間違い、枝野経済産業大臣、経済産業省も間違っているというふうに思っています。安全・安心があつて、それを客観的な数値として、これだけだったらいけますということを示して、私は再稼働についてはきちんと認めると。そうしないと、結果的に燃料費もそうなんですけど、市民の電力の確保というのは求められないと。特に冬場にかかってくるとそうですので、そういった非論理的な、非科学的な争いをしている場合

じゃないというふうに思っております。そういった中で、私はこれを転がすためには、やっぱり九電幹部の総辞職、それと枝野経済産業大臣については、きちんと数字を出した上での再稼動というのを早く図らないと、電力供給自体が泥沼に陥っていることを強く危惧するものであります。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

もとに戻りますけれども、放射性物質というのは風で飛んでくるんですね。気象条件で変わってくる。昨日、牟田議長と話しておりましたら、中国の黄砂と一緒にばいという話をされて、まさにそのとおりでなと考えたんですね。だから風ということであれば、さまざまな条件を我々は体感的に絶えずしておく必要もあると思うんですね。そうすれば、その日の気象に応じた避難ができるというふうになるかと思えます。

これも新聞に載った話でございますけれども、11月17日、放射性物質、10日間で地球を1周した。早いんですね。10日間で1周したということを気象庁の気象研究所、茨城県つくば市でまとめた。それと同時に、これも9月議会でお話しましたけれども、郡山高校、60キロ離れていますよね。そこの高校の先生が、津波の写真を映しに行っていた。そしたらぼんと音がしたので、見たら、12日だから1号機ですかね、見たら、福島原発のほうで爆発をしていた。そして、それを見て、4時ぐらいですね、それで学校に帰った。それまで何も思わなかったんですね。そうでしょう、放射能は痛くもない、においもしない、見えもしないですからね。学校に帰って1時間ばかりして、帰ったら、60キロ離れたところでガイガーカウンターがばちばちいっていた、火花を散らしていたと。サーベイメーターですね。それを見て、放射能の恐怖を知ったという話をこの前、紹介をここでしましたね。だから大事なことは、風下からまず逃げる。この考え方が必要だと思うんですね。だから助かるには、自助、共助、公助ですか、いろいろ考えもあろうけれども、やっぱりそういう身につけることも必要だと思うんですね。1次避難、2次避難、まず風下からだれでも逃げるという思想。そしてまた、ちゃんとした避難を、1次避難、2次避難という考え方は取り入れるべきだと思いますけれども、どのように思われるか、答弁を求めたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

兵法の原則は、退却は速やかに、そして大胆に、そして修正についても大幅にということが原理原則であります。そういった中で、今回の件については、どこまで1次避難、2次避難かという定義は別としても、やはり速やかにということと、もう1つは、2次のときは少し情報が整理できますので、そういった中で分けてきちんと対応するというのが、今回の

福島原発の不幸な事故の我々が学ぶべき視点だというふうに思っております。そういった意味では、議員と全く認識は同じであります。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

これは10月21日の新聞ですけれども、全原発を廃炉にという請願を福島県議会が全会一致で採択したんですね。これはたしか共産党さんが出されたと思いますけれども、はっきりしませんけれども。全原発を廃炉にという請願を福島県議会が採択した。これは実は委員会では可否同数だった。賛成、反対がですね、この請願を採択するのは可否同数だった。委員長が決めるところで否決になったというんですよ。しかし、そこからがしかしですけれども、県が脱原発を基本理念に掲げて事故の収束に向かう中、各会派が住民感情などを考慮。20日の午前から断続的に協議した結果、常任委の決定に反した異例の本会議採択となったということですね。この請願の中身といいますのは、県民は目に見えない恐ろしいものと戦いながらも、不安の中で生活している。特に子育て中の母親たちは、将来、放射能が子どもにどう影響するか心配だ。脱原発は県民のほとんどの意思だということで、全会一致、53人県議会にいて、5人が出ていって、48人が賛成で全会一致ですね。全会一致で採択された。市長は東日本大震災で幾度となく現場に行かれましたけれども、脱原発についてどうお考えか、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私は3月22日に、孫正義ソフトバンク社長とともに、私は古川佐賀県知事の特使として、一緒に福島原発に最も近い避難所の一つである田村市総合体育館に伺ったところであります。その中に、4時間から5時間かけてさまざまな皆さんたちと意見交換をしました。その中で、やっぱり原発は怖いと、放射線は怖いという声ばかりでした。その中で、やはり福島県民の皆様方、これは県議会が民意を代表されているところだと思いますけれども、やはり廃炉にという気持ちは十分に私はわかります。それはやっぱり行った者でないと、あるいはそれを恐怖として日常的に体感した者でないとわからない恐怖だということは、それは私は一端しか知りませんが、やはり馳駆を共有した者として、それは全く同じです。

そこで私は行ったことから、これは孫さんも同じなんですけれども、脱原発だということは私のスタンスであります。しかし、反原発ではありません。直ちに廃炉をした場合にどういふようなコストが生じるかといったことについても、日本は電力国家です。いいも悪いも電力に依存をしておる国家であるし、例えば、大陸と違って電力を輸入するというのは今の技術では無理です。なぜドイツがああいうふうに脱原発とかというふうにできるかというのと、

送電線のああですもんね、話題のイタリアから電力は供給さるっわけですよ。しかし、日本は島国であって、それはできません。そういった中で、どういうふうにするかという、やはり原発の比率を下げていくしかない、時間をかけて。だから、新炉はもう認めるべきじゃないというふうに思っています。これがだめになったときに、耐用年数が尽きてなったときに、今までは新たに一回つくりましょうとか、それに改良改良を重ねましょうというふうにしていた部分については、もうそれはすべきじゃない。その間に、これは産業政策もあるんですけども、例えば、太陽光であるとか地熱であるとか、あるいはクリーンエネルギーというのを、代替可能なエネルギーの開発というのを、これは絶対日本人はやっぱりやらなきゃいけないというふうに思っていますので、私は今までそういうスタンスで行ってきました。

ここで例えば、中山鉄工所さんが進めておられる小型水力発電、これはすごく今話題になって、今度、海外にも輸出されるそうなんです。今、武雄市役所のちょうど玄関の前のところ実際に、小型水力発電があります。これごらんになってもらえればわかります。日本のエネルギーの供給がこういうふうに向かうのかということは多分皆さんたちもおわかりになっていただくとお思いますので、ぜひごらんになっていただきたいのと同時に、そういったのを私とすれば、産業政策として進めていこうと。それともう1つは、これは単に産業政策で進めているといっても、一般の市民、県民はわかりません。わからないので、例えば、私は若木町に太陽光村ということをご構想として掲げました。そして、これがうまくいけば北方とか山内に広げようと思っておりますけど、私たちは一般の皆さんたちが見てわかるように、ああ、エネルギーはこれが正しいんだと、もうこれしかないんだということで、ぜひそういう思いを見せながらしていくと。これは教育現場も同じなんですけれども、そういった中で産業政策と、これはちょっと失礼な言い方になるかもしれませんが、広報ですよ、あるいは教育ですよ。こういったことも含めて、脱原発に向かっていきたいというふうに思っております。これは多分、議員と同じ見解だと思っておりますので、そういった意味での後押しであったり、いや、こういうのがあるよということをぜひ議員を初めとして、議会の皆さん方に教えていただければありがたいと、このように思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

中山鉄工さんのすばらしいのは、10センチぐらいの深さでも、縦軸を使いますので、発電可能だと言われます。ここでは少し流速が遅いですよと、流速がもっと早かったらもっと電気は上がりますということですね。今までは横軸でしたので非常に力が要ったけれども、小さな力でできるという話をされたですね。そういうのがどんどんどん武雄市の企業が伸びていってくれることを期待しているところでございます。

また、結局は原発が怖いのは、被曝ですね。被曝が怖いからでございますし、被曝に対して、実は11月21日の新聞ですから、20日ですね。「玄海“有事”で防災訓練」ということが載っておった。原発30キロ圏まで拡大がされたですね。そして、安全委員会が見直し案を出したんですよ。それが1つ。もう1つは、スピーディを初めて使ったんですね。初めて使ったというよりは、初めて市町村に配信をした。配信しました。これが配信されたスピーディでございますけれども、この日の風はこうですよ、上空はこれですよということで、模擬で、こう飛んでいますよという話が配信されるんですね。これが画期的なことだったわけでございます。

資料をお願いします。資料3ですね。（パネルを示す）これがただいま我々市町村に配信されたスピーディによる玄海原発で有事があった場合は、この日は北西の風でございましたので、こういうふうに飛んできますよと。これ武雄市ですよ。まともに飛んでくるという話ですね。こういうスピーディが出されました。

それと、資料5をお願いします。（パネルを示す）この資料5というのは、私が6月議会に使ったものですね。つまり、4月29日の航空機モニタリング、航空機ではかった。一番最初は無人機を飛ばしたんですよ。危ないですから、目に見えない、においもしない、大変なことで、無人機を飛ばした。そしてその後、4月29日にこういう状態で、これはベクレルですけれども、飛びましたよということで出たんですね。先ほど言いましたのは、その真反対、つまりこのときは北西の風が吹いていた。

私は6月、ここでお話しましたのが、資料2をお願いします。（パネルを示す）これ合成写真ですよ、合成でつくりました。合成絵です。つまり、福島原発の大きさが玄海で起こった場合はということで、これ重ねました。あのときは南東の風ですよ。北西の風が吹いたら、こういう形で影響が、同じ大きさありますよと書いた。これがスピーディにまともに出たんですね。これをまず念頭に置いておっていただきたいと思います、市長ね。

それともう1つ、そっちから先行きますけれども、もう1つ、物すごく問題になったのが、要援護者の避難なんですよ。今度改めて大規模で3万5,000人してみてもわかったのが、要援護者避難です。つまり、車いす利用者らに大きな不安もということで、車いすの女性が言われるには、福島の事故も怖いと思うけど、私たちは逃げ場がないと。そして、車いすなので動ける場所も限られているということで、この要援護者に対する避難の仕方が非常に問題になった。そこで、ぜひとも用意しなければならないのがということで、介護者のためにポータブルトイレというですか、移動トイレをやっぱり持っておかないかと。それとそれを覆いかぶすというんですか、テント、この2つは要援護者にとって必需品だと言われますけれども、ぜひとも備えるべきだと思いますけれども、どのようにお考えか、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

全く同感。備えたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

放射能に戻りますけれども、6月の武雄市議会で意見書を出しました。それは原発事故による放射線被曝から国民を守る法律制定を求める意見書を出しましたけれども、この中にもうたっていますように、今回の福島原発事故から防災対策重点地域の枠、E P Zですね、これは爆発のおそれがあるからということでの訓練なんですね。同心円。しかし、原発事故後、風の方向や風力で変化する放射線被曝に対する対策は不十分だということで、避難の方法などをぜひともしてくれという要望書を6月議会に出しました。そして、それはまず原発の被曝に対して全責任を国が負うことだ、国が全責任を負って、その後に国が東京電力に対して金を、賠償を取ればいいじゃないかという話をこのときしたですね。それからもちろん、放射能低減のための法律制定、これがうやむやですね。これぜひともちゃんとしてほしいということで出しました。それと先ほど言いましたように、国は原発事故後の放射性物質の飛来を予想し、そして防災対策の枠を広げることということを書いたですね。先ほどのパネルを見せたとおりの放射線被曝の、放射性物質の飛ぶ要素なんですね。しかし、今回、原子力安全委員会事務局は何と言ったか。第一原発事故では放射性物質の拡散を予想するスピーディが機能しなかったと言ったんですよ。スピーディが機能しなかった。このため、今後は予想値ではなく、放射線量の実測値、あるいは事故の進展に応じた対応をとることを盛り込み、モニタリングポストの拡充が必要だと、こっちに回ったんですね。

そして次、資料の4をお願いします。（パネルを示す）そういう考え方から、先ほどはスピーディで放射性物質が飛ぶ様子だったんですけども、安全委員会は、まずP A Z、これ5キロ以内ですよ。5キロ以内は直ちに避難する場所だと。U P Z、これは屋内避難の準備をするということですね。この50キロがP P Zということで、ここには放射性ヨウ素対策区域ということで、安定ヨウ素剤を配備するなど準備をするP P Zと、こう書いてあります。武雄、今度の20日の訓練で何をしていたか。どう言ったかと。そしたら、今、P P Z、安定ヨウ素剤を配布しておくというんですよ。全く気持ちを逆なでしていると思いますね。安定ヨウ素剤を配備しなければならないような危険な状態であれば、当然50キロ圏内も避難区域、避難訓練、これをすべきだと思いますが、いかがでしょうか、お伺いをいたします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

まず、武雄市民の皆さんたちに再度申し上げたいことがあります。というのは、牟田議長

がお住まいの若木町というのは玄海原発から30キロなんですね。武雄市の行政的な中心である、この武雄市武雄町については40キロちょっと。そして、玄海原発から一番離れているところが西川登町で、ここが大体48キロになるんですね。となると、先ほど議員がおっしゃった50キロ圏内というのは、99%以上の市の面積が入ることになります。そういった中で、やっぱりよかったと思ったのは、さきに例えば高槻市と応援協定を結んだこと。これが多分、今回の県が行われた訓練で浮き彫りになったと思うんですね、その大切さが。要するに、遠方ときちんと組んでおくと。逃げるのは遠方が一番です。

それともう1つですね、風向きいかんによっても濃度の問題があります。そういった中で、私どもは嬉野、大村、諫早、そして長崎と5市で、今回、災害の応援協定を結びましたので、そういったのも含めて、先ほど我々が拝見した資料になると、諫早、長崎まではそこまで到達しないということもありますので、そういったことも含めて、情報の開示を国にしっかり求めます。求めた上で、それは拙速であっていいと思います、拙速であっても。ですので、ああ、これは言い過ぎたねというぐらいでちょうどいいですよ、速報は。もう言い過ぎたと。私もよくそれで失敗しますけど。ですので、危機管理の観点でいえば、やっぱりそれをきちんと求めるといったことで、そういったことについては慎重よりも拙速が一番。それに基づいて、我々はこれは議会ともよくここは調整しなければいけないんですけれども、再度ですね、どこにきちんと、この前の、私どもも伊万里市とともに原発を想定した訓練を行いました。それとともに佐賀県も行われたと。こういった結果を踏まえて、さらに改めるところは改めて、そして来年の訓練の計画についてもそれをきちんと盛り込みたいと、このように考えております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

実は昨日、「みのもんたの朝ズバッ！」を見ていたんですけれども、見られた方もおられると思いますけれども、菅直人前総理が出ておられたんですね。彼が謝罪していたんですけれども、避難には2種類あると。1つは、原発の爆発から逃げにゃいかん。爆発のおそれがあるから逃げていく方法と、もう1つは、私は6月からずっと言ってきました、武雄市議会も出しました、つまり放射性物質からの避難、この2つを考えなければならないということと、スピーディを活用できなかったということで謝罪されたんですよ、きのう。今ごろという話がありますけど、それはそれなりに、やっぱり我々30キロ圏が、先ほど飛ぶことはわかりましたので、訓練が50キロ、60キロになれば大がかりになるからできないという話ですけども、例えば、円周が360度ですね。30度ずつ区切って、そう飛びますから、円じゃなくて。だから30キロにおいて、北西の風が吹いたときはこの団体よねと。じゃ、我々はこのあたりはこうしようという訓練をすれば、私みたいな素人でも考えるところですね。だから、

それは絶対必要だし、特に外国が、IAEAですか、一番最初行ったところが飯舘村だったですね。飯舘村の距離というのは、6月議会、9月議会で申しましたけど、武雄と同じなんですよ、玄海から考えたとき。そっちのほうがひどいんですよね、いっぱい飛んできますので。むしろ中心地より30キロ圏外ぐらいがひどい。そういうことを考えながら、やはり福岡にも飛びますし、佐賀にも飛びますから、放射性物質の飛来に対しての訓練ということをやっひとも音頭を取っていただきたいと思います。

それと、実測、モニター要員をふやすということで新聞に載っておりました、実測としますけれどもね。このとき思うのが消防団員。消防団員の方が福島ではひどい目に遭ったという話ですけれども、避難の指示をしていた。痛くもない、においもしない、見えもしない中でね。そしたら、ホールボディカウンター、内部被曝調査したとが物すごく数値が上がっておった。その方が言われるんですよ。人を助けるためにした行為はやむを得ないけれども、せめて教えていただければマスクぐらいしたよ、手袋ぐらいしたよと。何で今さらと、こういうことになるんですね。あるいはまたこれも新聞に載りましたけれども、佐賀新聞ですけれども、家族を残し、おれは行くと。これは津波の場合ですよ。命がけて誘導、そして帰らぬ人になった。つまり、家族4人で一緒におったけど、おまえは子どもを連れて高いところに逃げろ、おれは市民を守りに行くと言うて帰らぬ人になった。第一線の人なんですよ、犠牲になるのが。そうならないためにもちゃんとした訓練をしておかなければならないと思うんですね。

もう一回繰り返しますが、資料2をお願いします。（パネルを示す）資料2を見てわかりますように、実は伊万里の避難場所が北方のスポーツセンターとこの前あった。うちが先に逃げなければならないような状況なんですね。同じ線ですよ。ただ、伊万里も風下、ひよっとすればこっちがひどいかもわからん。目に見えない、痛くもない。そういう中で、こういう避難訓練がされているということをやっひとも今後考えていただきたいと思います。

時間をかなり浪費しましたので、次の質問に入りますけれども、資料の5をお願いします。

（パネルを示す）これは実は11月15日、国会で同心円避難による被害ということで、自民党の参議院の森まさこさん、この方が質問していた。11月15日ですよ。これ浪江町ですけれども、10キロ圏外の荻野小学校、生徒250人。10キロ圏外ですので何も指示がなかった。10キロ圏外にいたため何も指示がなかった。指示がないときに、まず第1回目のベントが行われた。被曝ですよ。そういう中で、テレビを見ながら不安を感じたので自主避難された。ここから浪江町の一番遠い津島支所というところがあるんですね。浪江町の中で原発から一番遠いところ。そこに、この赤い色を通過してずっと行かれた。その間、12日の爆発、14日の爆発で、まともにこの子どもたちは被曝をしたんですよ。地図じゃ赤い線ついていませんからね。2回した。その間、24時間以内にヨウ素剤を配らなければならないのに、何も聞かなかった。それだけならまだいいですよ。いいことないですけれども、原子力安全委員会

はスピーディを8時間前につくらせとったと言うんですよ。自分たちはこう逃げたんですよ、横に。横に逃げて福島市役所に戻った。このことが11月15日、問題になっていた。当初、スピーディを見たとき、細野豪志氏は、大好きだった人ですけれども、彼は今、原発担当大臣ですか、これを公表すればパニックになるから公表しないと行ったんでしょう。覚えてますかね。そうじゃない。情報を教えにやいかんですね。我々はいつその段階になるかわからん、10キロ圏外、20キロ圏外。だから、情報を開示しないことが被曝を広めたと思いますけれども、どのようにお考えですか、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

全く同感であります。やっぱりそこに民主党政権の甘さですね、危機管理を危機管理と思わない甘さがそこに出てきている。やっぱりその経験のなさが今回の被害を僕は大きくしたというふうに思っています。これ普通、私は元官僚です、過去官僚です。そして今、地方自治体をあずかる、皆さんたちの御協力であずかる立場にあったときに、原理原則は、要するに情報というのは拙速でもいいから全部流す。その上で、市民、県民、国民を信頼するという事に尽きます。そういった中で、恐らく細野さん、私はどういう人かそれは知りませんが、やはり国民をなめていたと思っています。自分たちがエリートで、自分たちが情報を管理し、民心を掌握した上でこういうふうにいるいろいろ出していく。だから、橋下さんと全く別なんですね。だから、そういったツケの甘さというのが出てきたと。ただ、これは批判ばかりしてもしょうがありませんので、我々はそういった意思決定のあり方であるとか、そういった避難であるとか、どういうふうに望ましい避難であるというのは、教訓として、糧として、特に民主党政権を反面教師として我々は学んで、それを自分たちの訓練に生かしていくと、心の構え、備えにちゃんと用いるということが求められているんだろうというふうに思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

まとめますけれども、（パネルを示す）資料6ですね。チェルノブイリ原発事故では、ベクレルで逃げたんですね。どれだけ放射能が降ってきたかで、ベクトル、力ですね。どれだけ放射能が降ってきたかで避難をした。148万が、これは聞いてみますと、牟田議長はスリーマイルのほうがちやんとしたんだよということでございますけれども、私が調べたのはチェルノブイリですので、違いがあるかもわかりませんが、強制避難を148万ベクレル以上したんだ。強制移住は55万5,000から148万、これこの前もちょっと話しましたね、時間がなかったんですけれども。それで、55万5,000から148万、これ見てください。強制移住か強制避

難、つまり武雄は黄色と赤やったですね。黄色は100万ベクレルからですから、当然、武雄市も福島みたいな原発事故が起これば、うちも逃げなければならないところにおるんだということだけをぜひともベクレルではかるべきだということです。シーベルトではわかりません。放射能の降る量がベクレル、どれだけぬれたがシーベルト。だから部署によって全く違いますので、ベクレルでの避難をちゃんとさせていくというのが、今後、国に法政化させるのが大事だということを6月議会に出したところなんです。

それで、災害廃棄物処理、これ私は、やはり市長はゼロでなければ受け入れないと。そうだと思いますね。ただ、今、政府のやり方、これは米の初出荷停止、これは覚えておられると思いますね、大波地区、154戸ですよ。ここの中で農水省が調べたときには、20から30ベクレルという話ですよ。米ですよ。主食ですよ。それをはかったときにそれだった。しかし、個人で持っていったら、その30倍の630ベクレルが出たんです。その後、1,200ベクレルが出た、154戸ですよ。こういう食べるものもそれくらいしかないのに、信用できないというのが私の瓦れき受け入れ反対の一番の根本です。信用できて、ちゃんとしたものであれば協力は大いにしなきゃいかんと思うけれども、食べ物をこれくらいの計算しかしていないという政府に対しては、とてもじゃないけど追従できないということなんです。それと、伊達市からもセシウム米が出ましたね。先ほどの資料6を見たらえればわかりますけれども、伊達市にも100万ベクレル飛んでいるんですよ。それはちゃんと航空機でわかっているんですね。そういうところはちゃんとした管理をしなければこうなるということでございます。ぜひとも放射線被曝ということは、これから私たちも頑張りますけれども、市長もぜひ武雄市民を被曝させないために力をかしていただきたいと思います。

あと5分でございます。次の汚泥処理についてでございます。

汚泥処理については、ごみと汚泥というのは自治体の最終的な仕事なんです。ごみと汚泥、し尿汚泥、し尿処理。ごみとし尿は最後に自治体がしなければならないところだと思いますし、今、幸いごみの問題については4市5町でしっかりやっていただいて、そして県外に持ち出すことなく、何とか県内処理がこの前、可決されたんですね。これまで福岡に10億円で持っていくという話ありましたが、県内処理という形ができました。今、し尿についても県外に一部お願いしているところがある。そういうことを考えれば、せっかくなつくた4市5町でございますので、広域圏の中で、やはりもっともっと話を詰めることができないか。できないかじゃない、ぜひともこのし尿に対して話をすべきだという考え方を持っております。1回は話が合ったということでございますけれどもですね。

それから、PFIについてでございますけれども、庁舎建設などというよりも、PFIはPFI法ですかね、平成11年にできまして、とにかく民間活力を利用していただと。民間活力を利用することによって、低廉で豊富ないろんな仕事ができるんだという考え方ですね。PFI法。もう1つ、リース業というのがあるんですね。自分で建てる、PFIで建てる、

そしてまた、こっちはリース業、こういういろんなものがありますからね。広く目を開いて、今後、庁舎建設かれこれにも向かっていかれたら、ぜひそういうことも研究をしていただきたいと思います。

それから、公認競技場の必要性ということを出しておりましたけれども、これは公式競技ができる公認競技場ですね。これは頭の中に私は山内を考えているんですね。どことは余り思っていないんですけれども、山内は自然豊かな学業、文化の町ということで広めたらどうかという話を合併当初しました。だから、山内の広々としたすばらしいところで、この公認競技ができるものをつくっていただければ、そのことによって公式競技を引っ張ることができれば、これも集客力アップにつながるのではないかという考え方から、ぜひともつくっていただきたいという考えをいたしております。

あと執行権と議決権ですね。これは、やっぱり議会と執行部は車の両輪のごとくと言いますけれども、両方とも信頼関係がなければ、やはり回っていかないとと思いますね。ぎくしゃくしますし。家のことを言うのはなんですけれども、うちの孫は今小学校1年ですね。だれかに迷惑かけたとしますと、「おい悪うなかばい」と言いよるですけど、「迷惑かけとうとよ」と言うたら、謝りますよ、まずは。ぶーっとしながらもね。いや、ぶーっとしながら謝りますね。やはり相手に迷惑かけたら、「ごめんね」という言葉も必要だと思いますね。そういうことから、こども部を怠慢部と言われた、それはやっぱり言われた人はたまらんよ、謝ってほしいなということで、懲罰委員会といたしましても、宮本議員を懲罰するんじゃなくて、名誉回復ということでぜひともしてほしいという結論をまとめたですね。それがまとまっていない。そんな自浄能力のない議会に対して市長は、こども部の名誉をどう回復するかという質問でございましたけど、時間がないのでこれは質問しませんけれども、最初のし尿の広域化、広域処理の検討、これはぜひともしていただきたいと思いますが、答弁を求めたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

石橋まちづくり部長

○石橋まちづくり部長〔登壇〕

広域汚泥の処理の話でございしますが、これは決算委員会するときにも黒岩議員から御指摘いただいております、大きな問題と考えております。したがって、今後、社会情勢、あるいは周辺状況等を考慮しながら、研究をしていくというふうに考えております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

最後の質問になろうかと思いますが、施工年月日はかなり違いがあるんですよね、部長ね。しかし、処理能力はいずれもオーバーしているんです。杵藤も鹿島も伊万里も武雄

もですね、すべてが今オーバーしている。だから、目の前に焦眉の急なんですね、これは。壊れるじゃなくて、能力がオーバーしているということですね。これは幸いとは言いませんけれども、汚泥処理もひよっとすればできるような話もありますので、ぜひとも4市5町でそのままとまって頑張っただけであればと思っております。

ことしも最後でございますので、来年も市民の皆さん方に対してすばらしい行政をしていただくよう希望いたしまして、私の一般質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（牟田勝浩君）

以上で23番黒岩議員の質問を終了させていただきます。

ここで議事の都合上、午後1時20分まで休憩いたします。

休 憩 11時54分